

名誉会員 田中助一先生を悼む

日本医史学会常任理事 杉立義一

本会名誉会員であり、また昭和七年以来の最古参の会員でありました田中助一先生は、平成十一年十二月三日、八十九歳の天寿を完うして、萩市東田町四二の自宅において、御他界なさいました。御生前、何かと御薫陶をうけ、敬愛申し上げていた一会員として、追悼文を綴らせて頂きます。

〔御経歴〕

明治四十四年二月、萩市に出生。

昭和九年三月、日本大学医学科卒業。耳鼻咽喉科を専攻して日赤本社病院等に勤務。

昭和十五年十一月、萩市に帰り、耳鼻科医院を開業、戦時中応召、陸軍々医少尉。復員後ほゞ五十年間、開業医、学校医、医師会役員として地域医療に尽力されました。

医史学研究

先生は学生時代より医学史ことに郷里である防長二国の医学史の研究に関心が深く、生涯を通じて研究、資料蒐集、著述に精励されました。

先生が『日本医史学雑誌』34(4)に載せられた「医史学と私」によれば、昭和六



故 田中助一先生

年、中山文化研究所に富士川游先生をお訪ねになり、そのまゝ会員になられ、昭和七年十月、研究所談話室で開かれた出席者十七名の中に、先生のお名前を見ることが出来ます。大家に伍して医学生生の先生が、例会に参加されていた事は、先生の医史学研究の情熱と七十年に及ぶ長い歴史を物語るものであります。

昭和十三年四月、京都市で開催された第一〇回日本医学会総会第一分科会（医史学会）で、「江戸時代に於ける解剖の事跡と文献に就て」と題する講演をされ、さらに郷里の先覚者青木周弼とその師能美洞庵についての研究を脱稿されましたが、帰郷後昭和十六年に相ついで刊行されました。さらに研究を進め遂に名著『防長医学史』二巻を刊行されました。

〔御著書〕主なるものをあげる。

昭和十六年六月 能美洞庵略伝

十六年十二月 青木周弼

十八年八月 萩市医師会略史

二十六年十二月 防長医学史上巻

二十八年六月 学校身体検査 共著

二十八年七月 防長医学史下巻

二十九年七月 山口県医師会史

四十五年八月 萩先賢忌辰録

〔郷土史研究〕

御郷里である周防・長門の郷土史研究の上からも、先生はまさに生字引的な存在であられたことは、万人の認める所でありました。この方面に於ても数々の公職、山口県教育委員、萩市観光審議会長・萩市文化財審議会副会長等々をお務めになり、市民の信頼を得られました。

〔受賞〕

これらの業績に対し、数々の賞をお受けになりました。叙勲(勲六等、これは戦時中のもの)、山口県医師会より表彰状・感謝状、日本医師会最高優功賞(昭和五十一年)、萩市教育文化功労者表彰、中国新聞社より中国文化賞 等。

最後に筆者個人として接しました先生の在りし日のお姿をお話し致します。私が最初に先生にお目にかかりましたのは、昭和三十七年五月、京都府医師会館で開かれた山脇東洋二百年忌記念講演会の時であります。まだお若くてお元気な先生は、萩にある東洋とその高弟の栗山孝庵の資料を持参して展示され、萩における人体解剖について講演されました。それ以後も各地での学会でお目にかゝり、また京都には殆んど毎年のようにおいでになりました。私が萩の先生のお宅を初めておたづねしたのは昭和五十九年六月二十三日の夜でありました。昼間、孝庵の解剖の跡などを見学したのち、先生宅に到着したのは、約束の午後六時を二時間も過ぎていました。先生は奥様とともにじっとお待ち下さっていました。その当時先生は数年前から青木周弼の旧宅に住んでおられました。武家町の一角で、隣家は木戸孝允の旧宅という風格のあるお家でした。先生は私のために、各部屋一杯に防長の医家先哲の墨跡軸物を陳列して、私に一品宛解説して下さいました。私は大きな教訓を学び、御厚意に今も深く感謝しております。

萩市長野村興見氏の弔辞によれば、先生が生前におあつめになられた研究資料や書籍類は、萩市立博物館に御寄贈になり、市が永久に保存して、研究に役立てて先生の御遺志を生かす道が決まっている由を承りまして、吾々医史学会員も、それに接する日の近い事を期待して居ります。

御令息宗昭氏に既に医業を継がれ、多年、行を共にされた令夫人は御壮健であります。

先生、どうか安らかにお眠り下さい。

御戒名

歴雲院顕誉一誠居士

合掌